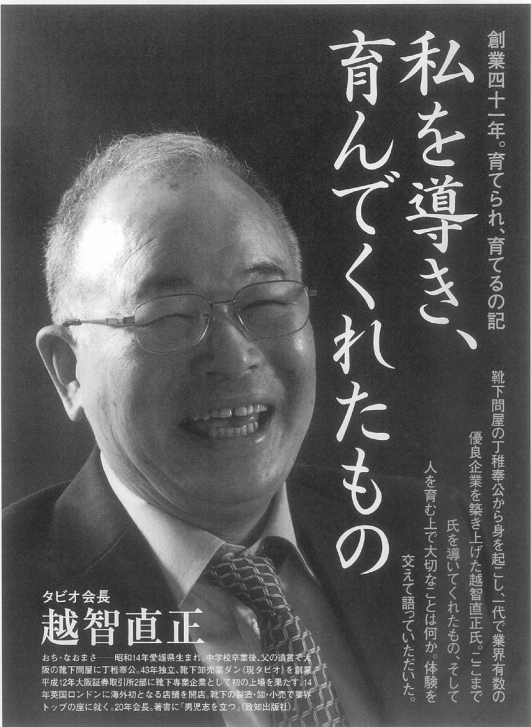


創業四十一年。育てられ、育てるの記

靴下問屋の丁稚奉公から身を起し、代で業界有数の優良企業を築き上げた越智直正氏。こまめ

氏を導いてくれたもの、そして人を育てる上で大切なことは何か。体験を交えて語っていただいた。

# 私を導き、 育ててくれたもの



## タビオ会長 越智直正

おち・なおまさ——昭和14年愛媛県生まれ。中学校卒業後、父の遺言で大阪の靴下問屋に丁稚奉公。43年独立、靴下卸売業ダン（現タビオ）を創業。平成12年大証証券取引所本部に靴下専業企業として初の上場を果たす。14年英国ロンドンに海外初となる店舗を開店、靴下の製造・卸・小売で業界トップの座に就く。20年会長。著書に「男児志を立つ」（教知出版社）。

### 私の目を開いてくれた 恩師の言葉

自分を導き、育ててくれた存在を語る上で、まず挙げなければならぬのが古典です。

今年の四月、教知出版より「男児志を立つ」を上梓しました。この本では、人生の節目、節目で私が励まされた五十の漢詩を、その時々々エピソードを交えてご紹介しています。七十歳にしてこの本を出したことで、心の区切りもつき、これからの決意を新たにするこゝろがきました。

私は、十五歳で愛媛県の実家を離れ、大阪の塾下問屋へ丁稚奉公へ出て以来、半世紀以上にわたって靴下一筋の人生を歩んできました。しかし、中学を卒業する時に恩師から、ただの商売人になりたくなかったら勉強をしな、中国古典を読め、という教を餞にいただいたことから、その言葉に従って古典を読み続けました。

最初は、古本屋で手振った雑誌「子」を、まじここと読むようなレベルでしたが、入社の最中や、配達で運転する車が自信を持てるわづかな時間にもページをめくり、

「予暇を惜しんで字を続けられた古典の豪華が、窮地に陥る度に私に手を差し伸べてくれた。私は、孔子は『学ははのためならず』と説いていました。いくら古典の言葉が暗記して教養を誇っても、大事な局面で役に立たなければ意味がない」と思うのです。

万年不況産業といわれる靴下業界に身を置いてのこれまでの道のりは、実に読書のおかげでした。ですから私の読書というものは、知識や教養を身につけるといった気負ったものではなく、活路を求めていくようにページをめくって来たというのが実態です。

人間の頭脳といものはつくづくうんできていくと思います。これまでに読んできた膨大な古典の中から、その局面で最も必要な言葉がパッと浮かんでくるのです。また私は、会議中であれ、お客様との商談の最中であれ、話が行き詰まるのを防ぐために、手帳に行きます。不思議なことには、きつことに各々たがふかと思つて手に取り、開いたページに、必ず答えを見出せます。困った時には、孔子や孟子を思い出して、歴史に残る先達が一言に

応援を歌い始めるのです。

今日私があるのは、孔子や孟子をはじめ、歴史に残る数々の先人が私を支え、育ててくれたおかげです。

古典は人生の応援歌——私の人生を通しての実感です。

### 人間にとろろ 青山あり

最初に古典と出逢ったのは、奉公先の大阪へ向かう汽車の中ででした。生まれ育った町からほんんと出たこともない十五歳の少年が、故郷を離れ、たった一人で遠見知らぬ町へ出ていくのは心細い限りでした。自分が乗っているこの汽車は本当に大阪に着くのか、着かなければどうしよう、そんな不安が胸がっばい、とても大阪に着いてからのことを考え余計な事もありました。高松で宇高連絡船が車がガタガタと押し込まれる時、四圍を離れる怖さがビクビクに運ばれた。

不安を紛らわすために、ポストバッグの中か箱にしまった夏目漱石の『明窓』を取り出し、ページをめくると、表紙の裏に鉛筆で漢詩が記されているのが目に留まりました。

男児志を立て郷関を出す、学もし成るなぐんば復還す、骨を埋つる何ぞ期せん埋骨の地、人間到るとぞ青山あり

人間が志を立てて郷里を出たらには、志を成就しない限り郷里には帰るつもりはない、私の骨を埋めるのは、郷里の墓とは限らない。人の世はどことへ行っても骨を埋める場所があるではないか。

当時の私に漢詩の意味を分かってはすいません、ところが不思議なことにその時は、青山というのが人間の死ぬところ、お墓みたいなところだろうというのが分かってはったのです。

自分は、辛かったら逃げ帰ろうと思っていた。しかし帰るなことを思っていた。この漢詩を見た時、即座に心を改めることができたのです。

### 兄の心に 育てられ

十三年に及んだ丁稚奉公は過酷を極めました。が、古典のおかげで、あの厳しい体験がなければ、いまの私はないと断言できます。